

Niigata University

2012年卒業記念号

No.182

新大広報

特集


旅立ちの時

～感謝と志を胸に～

学長からのメッセージ

CAMPUS INFORMATION

第60回卒業修了制作展

 新潟大学

学長からのメッセージ Message

新潟大学長 下條文武
GEJYO Fumitake



平成24年の春に新潟大学を卒業される皆さん、
大学院を修了される皆さん、
ならびに新潟大学を
退任・退職される皆様へ、
心からのお祝いを申し上げます。

卒業、大学院修了を祝して

今年も、我が国の次代を担う前途有為な卒業生及び大学院修了生を本学から送り出すことができますことは、私たち新潟大学の大きな喜びと誇りです。多くの皆さんは、これからこの新潟大学を離れて実社会に飛び立つと思いますが、自らの目標に向かって様々なことに果敢に挑戦してほしいと願っています。

昨年は、3月に東日本大震災という未曾有の災害が、県内では7月に新潟・福島豪雨が発生しました。私達は、こうした自然災害への備えや、エネルギー問題とそれに伴う社会的基盤の整備など、解決しなければならない多くの課題に直面しています。しかもこれらは、我が国だけでなく地球規模で考えてい

くべきものばかりです。そんな中で、社会が抱える不安を払拭する次世代の光として、皆さんに掛けられている期待が非常に大きいということを是非自覚してほしいと願っています。

この春の新たな出発にあたって、将来への希望とともに、多少の不安もあるかもしれません。しかし、皆さんには、新潟大学で身につけた、幅広い視野、深い教養と専門的な知識、さらに「若さ」という強力な武器によって、自信をもって社会で活躍してほしいと心から願っています。そのためには、失敗を恐れず、むしろ失敗から何かを学び取るという姿勢で挑戦を続け、夢に向かって進んで下さい。

皆さんの前途に幸多かれと祈念いたします。

退任・退職を祝して

退任・退職される教職員の皆様は、永年にわたり本学にお勤めになり、それぞれのお立場において献身的にご尽力いただきました。心からの敬意と感謝の意を表するとともに、お祝いを申し上げます。

近年の国立大学をめぐるのは、引き続き厳しい環境にあり、様々な課題が立ちふさがっている中、皆様に絶大なご協力をいただいたお陰で新潟大学は着実に発展しております。新潟大学は今後もその使命である教育・研究・社会貢献活動の一層の充実に努めて参る所存です。皆様におかれましては、これからも本学に対する変わらぬお力添えとご支援の程を宜しくお願い申し上げます。

6年前の平成18年4月に、新潟大学の発展と会員相互の親睦を目的として、「全学同窓会」が結成され、本学との懇談会、交流会、講演会など活発な活動が行われています。

皆様には同窓会活動を含めた様々な形で、引き続き新潟大学に対しご支援とご協力をお願いいたします。どうぞ折にふれて新潟大学を訪れ、恩師、先輩、同級生、同僚や教え子達と交流をお持ちいただきたいと願っています。新潟大学は皆さんの心の故郷として、いつも皆さんへの扉を開いています。

最後に、この度人生の区切りを迎え、新たに出発される皆様方を、あらためて祝福申し上げますとともに、健康には充分ご留意され、お元気で活躍されますことを願って送別の辞といたします。

旅立ちの時

～感謝と志を胸に～

悩み挑んだ日々を糧に新たな一歩を

[卒業・修了する学生]

1.04 難波 純也
 人文学部

國元 麻未
 教育学部

1.05 渡邊 マリヤ
 法学部

長谷川 大将
 経済学部

1.06 内山 雅貴
 理学部

風間 明
 医学部

1.07 角 明日香
 医学部

吉田 暢恵
 歯学部

1.08 沓澤 崇之
 工学部

坂井 宙
 農学部

1.09 對木 隆介
 大学院教育学研究科

大野 健
 大学院保健学研究科

1.10 STEPONAVICIUTE Agne
 大学院現代社会文化研究科

石川 直幸
 大学院自然科学研究科

1.11 加藤 寛子
 大学院医歯学総合研究科

4年間のメディア生活

メディアについて知りたい、情報化社会について学びたいと思って入学し、その後の4年間の大学生活は本当に充実したものでした。古いメディアに触れることのできる貴重な実習に参加したり、実際に映像制作をして他大学と交流する中でメディアについて考えたり。(宮城に行っておいしい牛タンを食べたり。)自分のやりたいものを勉強できることの幸せを日々感じる毎日でした。

あと、学業だけでなく、サークル活動などで多くの友人ができたことが、本当に良かったです。そして、こんな我儘で気分屋な私を支えてくれた友人たちや先輩、後輩、先生方、家族(毎日帰りが朝方でごめんなさい)には感謝の気持ちで胸一杯です。(普段は毒舌で腹黒キャラの私なので、改めてこんなことを言うと少し恥ずかしいですね。)

4月からは初めて地元新潟を離れ、東京で大学院生として暮らします。引き続き、学ぶ志、情熱をもって、研究に打ち込んでいきたいと思っています。



サークルのイベントにて。本人は左端。



旅立ちの日に

私が大学生活の中で最も学んだことは、人間関係についてです。同期の仲間達、先輩方や後輩、先生方、沢山のいい出会いに恵まれました。色々な人とかわり合い、考えや意見を交換する、互いの気持ちをさらけ出しぶつけ合う。そこから考えを廻らせたり、いっぱい悩んだり傷ついたり…。正直、今まで上辺だけの人付き合いしかしてこなかった私にとって、こんなに色々な事を考え、悩んだのは初めてでした。人間関係は、他人と向き合っているようで、実際は自分自身と向き合うことのように思います。こんな風に考えることができたのは、私の周りの人たちが、真剣に私と向き合っ、本気で話をしてくれて叱ってくれたからだと思います。皆さんには感謝してもし切れません。本気で向き合えば人は変わる、なんて言うけれど、私も本気で人と向き合える教師になりたいです。最後に、こんな機会をくれて、何があっても私を見捨てずにいてくれた家族に、心から感謝します。



体操発表会にて保健体育科の同期との記念撮影。本人は前列右から4番目。



大学生活、そして将来へ

「どのような大人へと成長できるだろう？」選択次第で幾許にも広がる可能性、そんな期待に胸膨らませて入学した日から4年が経とうとしています。私にとって大学生活とは、拓けた視野・自由な選択と、伴う自己責任というものでした。留学、日々の授業や学内行事など、国際的な視野を持った大人へと成長すべく様々なことに挑戦してきました。そんな中で忘れてはならないのが、私を支えてくださった全ての方々です。他愛もない毎日が輝き、挑戦のきっかけを与えてくれたのは、紛れもなく友人や先生、そして家族でした。彼らの支えがあってこそ幸せな生活が送れたのだと、今、実感します。

来年からは、培った能力を活かすべく国際協力という新たな現場に立ちますが、支えてくださった全ての方を大切に、自分が誰かにとって大切な存在となれるよう、国籍や文化を超えた絆を築いていきたいです。

幸せで充実した4年間を送れたことに心から感謝しています。



留学先での友人らとのBBQで。本人は左から2番目。



気の向くままに、流れるままに

大学生活は充実していて楽しい4年間でしたと、月並みな言葉をふと思ひ浮かべた。確かに、友達、学門、サークル、ゼミ、大学での経験は面白いものばかりだと、そう思う。人間関係はいつも見る顔ぶれから授業で作業や議論をする仲間まで多様だった。授業では興味のあることを学べたのに加え、偏った考えを含め様々があると再認識できた。ギター、フィギュア、馬、ビリヤードと新しいものに手を出した。そんな中でも自分らしく、ぼんやりと物思いに耽り夜から夜まで眠り、怠惰を尽くし有意義な日々を送ることもできた。そして断言できる、大学生活を通し自分の価値尺度において成長したと。

4月からは社会人であるがどうにも不況だ。赤子のように、こんな社会へと生まれおちる我が身を嘆き泣き叫びたいものである。ともあれ、迫られたら応じねばならないのも人の性。まあ、可能性という便利な言葉に善意も悪意も込め、自らの手で未来を切り開いていこう。



サークルのみんなと新潟競馬場の来賓室にて。本人は前列右から3番目。



卒業するにあたり

新潟大学に入学し、はや4年も経っていたことに驚き、とても短く感じられます。

私の所属する学科は野外実習で県内外問わず多くの場所を巡りました。特に2年次終わりにあった大巡検は、山口県は秋吉台から四国地方を巡って淡路島で終わる7日間のたいへんな行程でありましたが、私自身多くの経験を得られ良い思い出でもあります。また、3年次の夏休みにあった進級論文でも十日町市に1か月近く同じ学年の仲間たちと宿泊し、協力しながら課題をこなしました。その他の野外実習も含め、室内の研究だけでなく実地調査の経験をこれからも生かしていきたいと思います。

地質科学科は学年間の仲も良く、学科内でよく飲み会やスポーツ大会をし、楽しく過ごすことができました。大学を卒業しますが、多くの学科の先生、先輩の皆様や友人たちにはたいへんお世話になり、本当に感謝しています。大学生活を支援してくれた両親にもありがとうと言いたいです。



卒業研究の現地調査にて。



仲間とともに

今まで出会った友人や先輩、後輩は何にもかえがたい財産である。医学科は卒業生のほぼ100%が同じ職業に就くという特殊な面を持っており、そのぶん大学時代からのつながりが強い。これからの人生においてとても心強い存在となるだろう。

現在、日本の医療は多くの問題を抱えている。少子高齢化が急速に進む中で、医師の不足や医療費の増大による医療崩壊はもう目の前まで迫っている。私たちは卒業と同時に、この多くの問題を抱えた医療現場へ飛び出していかなければならない。新潟大学での6年間で身につけた知識はごく限られたものであり、今後、医師として働く中でさらに知識と技術を吸収していく必要がある。ときには激務と重責から逃げ出したくなることもあるかもしれない。そんなときこそ、新潟で出会った仲間と声をかけてみよう。ともに悩みを語り合い、また次の日から患者さんのために力を尽くそう。



医学部大講義室横にて。本人は左端。



新潟大学を卒業するにあたっての思い

新潟での大学生活は、本当にあっという間で、とても充実していた4年間でした。地元を離れての一人暮らし、アルバイト、サークル活動、学友会、医学祭、病院実習。初めての経験が多く、毎日が一生懸命で、とても楽しい日々でした。私が楽しい日々を送ることができたのも、新潟で出会ったたくさんの人たちのおかげです。友達とは多くの時間を共に過ごしました。笑い合い、助け合い、時には喧嘩もした日々が、私にとって何物にも代えがたい大切な思い出です。つらい時も、一緒に頑張る仲間がいたからこそ乗り越えられました。この大学生活での経験ひとつひとつが、自分を成長させてくれたと思います。

もうすぐ卒業ですが、これまで自分を支えてくれた家族、友人、先輩、先生方やお世話になった皆様方に心から感謝しています。

これからは4年間で学んだ臨床検査の知識を生かし、色々なことを吸収して、何事にも一生懸命に取り組んでいきたいと思います。



卒業研究の研究室の恩師と仲間と。本人は左から2番目。



気づけばもう6年

初めて新潟に来てから6年、あっという間でした。入学当初は、新潟は寒いし一人は寂しいし、とにかく不安だらけでしたが、今となってはどんなことも思い出深く、懐かしく感じられるのは、ここで過ごした毎日がとても楽しかったからだだと思います。中でも特に鮮明に記憶に残っているのは5・6年の臨床実習です。実習では、実際に患者様の治療をさせていただき、ただ机の上で勉強するだけでは得られないような貴重な体験を沢山させていただきました。同級生のみんなとは朝から夕方まで技工室で過ごし、様々な症例について相談し、一緒に勉強してきました。大変な事もとても多かったです。毎日本当に楽しかったです。みんながいなければ今の私はいないと思います!!

もうすぐ新潟大学を卒業し社会人となりますが、卒業しても大学生活で得た事を忘れずに、これからも日々学び続けていきたいと思えます。最後に、新潟大学で出会った全ての方々、両親に感謝しています。



技工室にて。本人は左端。



卒業を迎えて

新潟大学で過ごした日々を振り返ってみると本当に様々な経験をする事が出来ました。大学では高校時代までとは違い自分の出身地と異なる都道府県の人達と接する機会が格段に多くなり、そこで多様な考え方や価値観に触れることができ、とても刺激的でした。

勉強面では学期末試験やレポートの提出期限が近づいたりすると、朝から晩まで図書館に籠ったり徹夜をしたりと辛い時期もありました。しかし、学科の友人達と助け合うことで何とか乗り越えていくことができました。学科の友人とは一緒に飲みに行ったり遠出をしたりなど学校外での付き合いもたくさんありました。気の置けない仲間が多くて、周囲の環境に恵まれていたなと感じます。

私は新潟大学大学院への進学が決まり、そこで専門的な知識を一層深めていくと同時に社会人として必要なスキル等を身につけていきたいと考えています。これからもあらゆることに対して全力で取り組んでいきたいです。



研究室の忘年会にて。本人は1列目左側。



卒業にあたって

大学4年間は本当にあっという間であったと感じます。大学生活の中で特に印象に残っているのはもちろん部活動です。入学後中学から続けているソフトテニスを大学でも続けたくてソフトテニス部に入部しました。

4年間で一番多くの時間を共有したのはやはり部活動の仲間たちです。普段の練習、特に精神的につらい合宿、年2回の北信越大会、部活後の食事、飲み会、そして部としては何年ぶりに奇跡的に(?)出場できた全国大会等色々ありました。部活動ばかりしていて良いのだろうか?と何度も思いました。

しかし、部活動が思いの外、就職活動など他の場面で役に立つこともありました。試合で緊張したことを思い出して面接の際に比較的平常心で臨めたことなどがその例です。部活動に限らず何か一つのこと打ち込み、自分なりに何かを得ておくことが大切だなと今になって思います。大学生活で学んだことを活かし、社会人としても成長したいと思います。



大学テニスコートにて。本人は前列左から2番目。



修了に際し

社会人生活を経てから、新潟大学に学部から入学し6年。2回目の大学生活に期待と不安を抱いていたのがつい最近のように感じますが、いよいよ春より念願だった教員への道へ歩み出すこととなりました。

一回りほども違う同級生や先輩、後輩たちとも不思議なほど打ち解けることができ学問の追究はもとより、部活動(陸上競技)にも全力で取り組めたことなど公私にわたって非常に充実した時間を送ることができたのは自分にとって大きな宝であり、またこのような経験ができたのは新潟大学であったからだと今、改めて実感しています。

在学中もそうでしたが、大学を出てからも「新潟大学」という名を背負っていくという誇りと自負を持ち生活をしていきたいと思っています。

新潟大学、ありがとう!!



恩師、ゼミの同期と。本人は後方左側。



修了にあたって

桜が咲き始める頃、リトアニアから新潟に到着して、ドキドキしながら大学のキャンパスを回った最初の日…。入学式…。他国の留学生や日本人の学生と交流…。ヴィジュアル系を研究した四年間…。もうじき新潟大学大学院の修了を迎える今、ここで過ごした時間を振り返ってみると、何というかけがえのない時間だったと、ついに嘸いてしまいます。その中、なにより大切なのは、ポピュラー・カルチャーに対する幅広い知識を持つ教員の指導でした。そして、ティーチング・アシスタントとして勤める機会でした。このように、予想以上に経験を重ねることができ、「教師」ということを学べました。大学の外でも様々な活動を通して、日本の現代文化と伝統文化を味わうことができました。そして、帰国した後、日本の文化を教える大学教員になり、新潟大学で重ねた経験を生かしていきたいと思っています。



新潟まつりで大学の友達と、本人は左から1番目



二兎追うものは二兎を得る

私は修士研究を行いながら、本学脳研究所(統合脳機能研究センター)における研究にも参加する機会に恵まれました。統合脳機能研究センターにおける最先端の研究に触れ、驚きと感動を覚えました。忙しい毎日ではありましたが、研究漬けの日々がとても充実していたと感じられ、あっという間の2年間でした。

修士研究では、研究成果を論文にまとめ筆頭著者として学会誌に発表することができたことが一番の思い出です。自分の論文が学会誌に掲載されたときの達成感は一生涯忘れることがないと思います。統合脳機能研究センターでは、簡単な作業の手伝いからスタートし、少しずつ実験に加わることができるようになりました。センターの先生方の指導はとても厳しかったですが、研究に対する姿勢を新たにできる良い機会でした。

「二兎追うものは一兎をも得ず」と言いますが、私の場合、「二兎追うものは二兎を得る」ことができ、とても幸運な2年間でした。



統合脳機能研究センターの先生方と。本人は右から2番目。



絆を紡いだ6年間

24歳の私にとって6年という時間は決して短くないはずだが、やはり卒業を前にするとあっという間である。しかし、脳はきちんと覚えていて思い返すと様々な思い出が浮かんでくる。もちろん楽しかったことばかりではない。しかし私は素直にこの6年間に感謝をしている。そう思えるのも私を成長させてくれた出会いのおかげである。それは時として師であり、仲間であり、時には自然そのものであったりもした。そしてその思い出は強烈に脳裏に焼きついている。どしゃ降りの中、山で調査したこと。朝日を見るまで部活に明け暮れたこと。私はそういった出会いに揉まれ励まされ雨に打たれるたびに強く成長させてもらった。そして出会いは絆となった。この絆は偶然であり、形あるものではない。しかしながらこれが紛れもない大学生活の一番の財産であると思う。2011年を表す漢字は絆であった。これからも新しい絆が私を成長させてくれるに違いない。次の出会いを楽しみにしている。



研究生の仲間と。本人は前列左から2番目。



進化し続ける大人たちとの出会い

大学院4年間の収穫は、人生の中の限られた出会いの中で、組織再建口腔外科学分野の先生方と一緒に仕事ができただけで済ませる。超人的とも思えるほど膨大な仕事をこなす様、美しくすばやい手術、それは“頭もメスもキレル”私が今まで出会った大人とは一線を画したプロフェッショナルであった。

先生方の歯科医師、研究者さらには一個人としての生き方、その考え、それは到底今の私が努めたところで理解しえないものであろう。しかし、その片鱗に触れるだけであっても大いに刺激的であった。そこに見たのは、現状に甘んじず進化し続けんとする内に秘めた炎であった。己の未熟さを知り、偉大な人々に近づきたい一心で努力をしてきたが、限られたこの4年の成果は微々たるものであった。だからこそ、努力をし続けた者だけが到達できる領域に私も足を踏み入れたいと思うようになった。そんな世界の存在を教えてくださいました先生方に深く感謝している。



組織再建口腔外科集合写真。本人は中列右端。



旅立ちの時

～感謝と志を胸に～

次世代へ希望の^{たすき}襷を繋ぐ

[退任する教員]

p.13 村上 吉男
 人文社会・教育科学系(人文学部)

五十嵐 由利子
 人文社会・教育科学系(教育学部)

p.14 福原 晴夫
 人文社会・教育科学系(教育学部)

長岡 成夫
 人文社会・教育科学系(教育学部)

p.15 齋藤 忠雄
 人文社会・教育科学系(経済学部)

島倉 紀之
 自然科学系(理学部)

p.16 岡田 徳次
 自然科学系(工学部)

宮川 道夫
 自然科学系(工学部)

p.17 三沢 眞一
 自然科学系(農学部)

有田 博之
 自然科学系(農学部)

p.18 宮下 純夫
 自然科学系(大学院自然科学研究科)

岡田 正彦
 医歯学系(大学院医歯学総合研究科(医))

p.19 阿部 春樹
 医歯学系(大学院医歯学総合研究科(医))

p.20 鈴木 昭
 医歯学系(大学院医歯学総合研究科(歯))

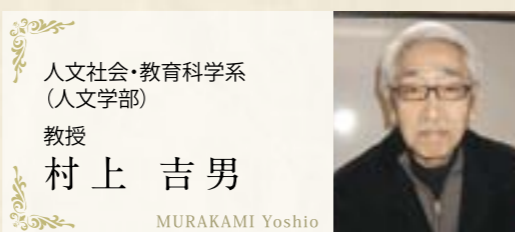
p.21 畠山 勝義
 医歯学系(大学院医歯学総合研究科(医))



新潟大学を退任するにあたって

今からおよそ30年前、すでに退官された斎藤保男先生のご推薦を受け、旧教養部に着任できたことがつい昨日のように想い出されます。それまでは東京で助手さらに非常勤講師として、月曜から金曜に亘り、毎日違った大学に通い、フランス語や文学を教えていました。それでも今の学生諸君の就職事情と比べれば、勤めが得られただけでも救いでした。また教育のみか、研究可能な場が一大学であることは幸い以外にないことでした。だが教養部時代は学生に語学やフランス文学を教えることができて、指導する機会が不可能でした。そこで学友会組織下の準硬式野球部の顧問にしてもらいました。この部のことは人法経同窓会誌「青松」に記し、「新大公報」ではその写真掲載をお願いしましたが、今ではOB、OGを含め、500人以上のわが息子娘たちに囲まれています。野球部諸君、25年間ありがとう。

平成6年人文学部に移ってからも、部員との交流のほか、ヨーロッパ文化コースの諸学生に私の研究分野を聞いてもらうことは喜びでした。みなさんに対しても18年ありがとうといわねばなりません。そして野球部を含んだ3つの職場にて出会った多くの教職員の皆様方にこの場をお借りして感謝申し上げます。



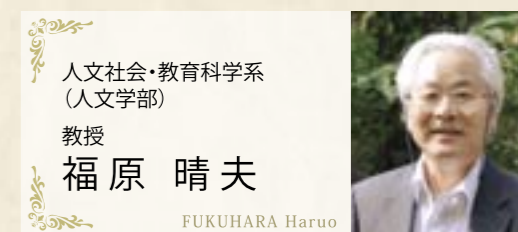
2006年8月全日本大学準硬式野球選手権大会にて。

退職にあたって思うこと

1976年の4月に教育学部長岡分校に生物学の教員として赴任しましたので、以来、新潟大学には36年間お世話になりました。これまでの先輩・同僚・事務職員の皆さん、研究と教育を共にしてきた学生・院生の皆さんに心から感謝いたします。

私の教員生活の中で最も大きな出来事は、分校の統合と独立行政法人化と言えます。分校という小世帯での同僚と学生諸君との緊密な付き合いは、魅力ある懐かしい思い出ですが、生物教員1名という教育・研究環境にはずいぶん物足りないものを感じていました。1981年の統合で、五十嵐地区において同じ専門の先生方との交流が出来るようになり、また何よりも学生諸君が多数の同学年生の中で学べる教育・研究環境の変化に飛躍的な進化を感じたものでした。

2004年の大学の独立行政法人化は、これまでの、不十分ではあっても、話し合いの中で教育や研究の環境を作ってきたものを戻す方向のものと思えません。最近の大きな流れは、皆の意見を集めた大学の「独立」や「教育と学問の独立」でなく、むしろ逆の方向に向かっていると感じられてなりません。新潟大学が、英知を集めて「独立」に向かって進化していくことを願っています。

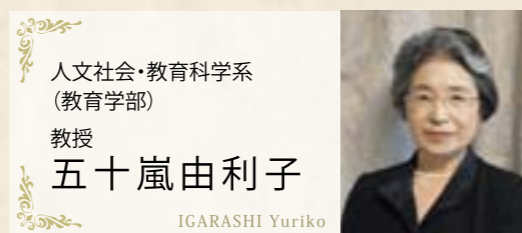


北八ヶ岳白駒池実習にて。

新潟大学を退任するにあたって

新潟大学には学部学生としての4年間、そして教員として40年余りお世話になりました。私の専門は家庭科教育・生活科学のなかの住居学で、健康で快適に住まうにはという視点を持ちながら教育研究を行ってきました。特に高齢化が急速に進んでいる状況から高齢者の住環境改善は急務であると考え、実態調査・実測調査を行いました。また、住宅の気密化に伴い課題となった調理残臭については民間との共同研究の機会を得、研究の発展に繋がりました。そして、研究環境をも一変させる大災害が発生しました。中越地震、中越沖地震後の避難所、仮設住宅、そして住宅再建への道のりを災害復興科学センター兼務教員として調査研究に係ったことは、私自身の災害復興への思いに大きな影響を与えるものでした。私の研究のほとんどは、本学だけでなく他機関の研究者の協力、そして行政はじめ多くの方の協力が不可欠でしたが、研究室の学生たちの熱心な取組があつての研究でした。

また、法人化後の大学評価、機関別認証評価や女性研究者支援事業など、新潟大学の初めての取組に係りましたが、多くの教職員、学生の皆様からご協力賜り、なんとか責務を果たすことができました。この場をかりて感謝申し上げますとともに、新潟大学のますますの発展をお祈りいたします。



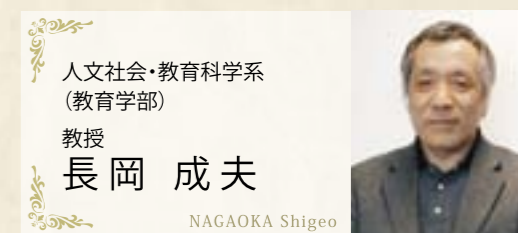
恒例のゼミ旅行(2004年3月:良寛記念館にて)。

退任にあたって

今まで社会科の1年生を対象として「スタディ・スキルズ」(大学学習法)の授業に計4回参加してきた。テーマとして「複数の人の命を救うために一人の命を犠牲にすることは許されるか」を取り上げた。具体的には、健康な一人を犠牲にしてその臓器を取り出し数名の患者を救うという提案を授業の素材として用いた。賛成か反対か、その理由を述べつつ議論してもらった。結論ではなく、思考過程が重要だと強調しつつ。

1回目には、賛成論として死刑囚を臓器提供者にすればよいという意見が目立った。多くは反対論であった。2回目には、このような賛成論は影を潜めた。中国での死刑囚の処遇についての報道が影響したのかもしれない。3回目には、最後のレポートの段階で、いわばおぼろげとだろうか、賛成論を展開するものがいくつか現れた。2011年度の4回目には、授業での議論の中で賛成論を支持する人が現れた。その立場の人たちから反対論者へその論拠について質問をもらった。私的感想では、常識的立場である反対論の論拠が必ずしも確固としたものでないこと、これが見えてきたようである。

3年ごとの担当で、当然参加学生も異なるのだが、議論の場が成長してきたような印象をもって終わることとなった。



2002年度の総合演習、共同作業終了後。

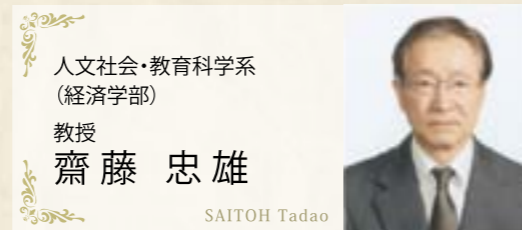
新潟大学回想

およそ20年前、3番目の勤務校として新潟大学に赴任致しました。以来、日本海側特有の気候の下、四季折々の風情を味わいながら徒歩通勤しています。この間、土日も含めて自由に研究室を使わせていただきました。とは申せ、研究の実質に欠けていたことは恥じ入るばかりです。

私の専攻する財政学の魅力によるのでしょうか、比較的多数のゼミ生・院生と縁がありました。とりわけ多様な社会人院生および7つに渡る国の留学生には、貴重なことを学ばせてもらいました。指導した学生との交流は、第1期生の卒業以来今でも続いています。大学院出身有志とは毎月一度「現代経済を語る会」として、学部ゼミ・大学院出身有志とは年に一度「新潟・六月の会」として。

なお、お引き受けした新潟大学競技スキー部顧問は、子供のときから続けているスポーツにおける機縁と言ってよいでしょう。

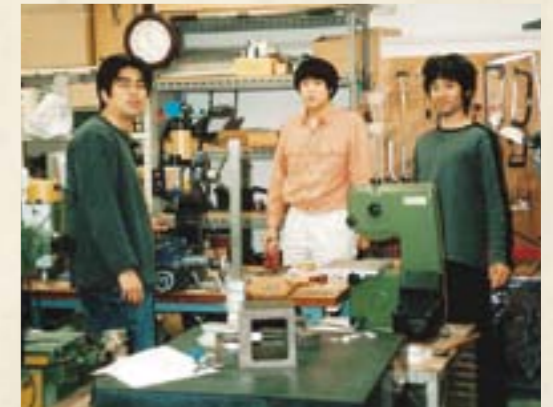
さて、至らない私がここまで無事に職務を果たし得たのは、ひとえに教職員のご協力および学生との共同に依拠しています。心から感謝致します。新潟大学のご発展を祈念申し上げます。



某年度、「卒業論文中間発表会」に出席したゼミ生・院生と一緒に。

退任にあたって何かを伝えるとすれば

大学を卒業後直ちに通産省工業技術院(今の経産省産総研)の技官になり、18年間ロボットシステムの開発に従事した後、母校に奉職した。以来大きな問題もなく、25年間歩んでこられたのは、内外の多くの方々や諸先輩の温かいご支援があったからこそと感謝の気持ちで一杯である。旧時を彷彿させる思い出も多い(写真は、学生と一緒に斬新な車いすを作るための機械加工の現場)。これを機会に学生諸君に伝えるとすれば次を挙げたい。1つは自己を成長させるよき意味での世の中の仕組みや制度を積極的に利用すること、2つ目は今置かれている状況は自分に与えられた宿運として受け入れ、その中でベストを尽くす事の大切さである。人生において楽しいことばかりや辛いことばかりが続くとは言えない。どんなに美味しいものでも食品には賞味期限がある。要するに、ある状態は未来永劫でなく良くも悪くも変化すると解釈して対応することが重要である。3つ目は、何事にも鋭い洞察力をもってポジティブに挑戦することである。とくに、技術者を目指す若い諸君にあっては、確度の高い先見性をもって行動していかなければ競争に勝てる製品の開発にはつながらない。分野を問わず、優れた技術者が育つことを祈念する。



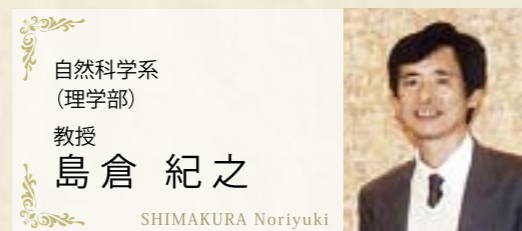
2003年9月、歩ける車いすの開発を目指す学生達。

新潟大学を退任するにあたって

新潟大学理学部化学科を卒業後、東北大学で理学博士の学位を取得、科学計測研究所で助手として過ごした後、新潟大学に戻ってきました。私が赴任したとき、教養部の化学科は6人の教員で構成されていました。教養部時代は、理学部化学科から学生の世話を頼まれることもありましたが、もっぱら1,2年生に対する化学の基礎の講義と実験を担当しました。

就職した年は、私がそれ以降所属していた原子衝突研究協会が設立された年でもありました。当初は、私も含め理論家は20名ならず、実験家を入れても50名には達しないという小さなグループでした。幸いにも新潟大学に志を同じくする先生がおられて、ここで一旗揚げようと意気込んだものです。使える予算が比較的潤沢で、自由な雰囲気での研究ができました。

平成6年に廃止となった教養部から理学部化学科に移動になり、17年間お世話になりました。新しい研究棟ができたときに、コンピューター室を立ち上げることができ、恵まれた研究環境で過ごしました。「衝突過程における非断熱遷移」というテーマで研究をやり続けられたことは大変幸せでした。この場を借りて、お世話になった方々にお礼を申し上げるとともに、厳しいこの時代を乗り切り、新潟大学がますます発展していくことを祈ってやみません。



平成6年、教養部廃止の際の飲み会。

退任の日を迎えて

地球規模の大きな変化で揺れる平成24年、3度目の職場を去る日が来た。これまでに学んだことを振り返り、新たな出発点の道標としたい。

工業高校卒で入所した日立製作所の人たちは物静かな秀才の集団で、ここで社会との向き合い方を学んだ。2年間モータの設計をした後、社内大学で1年間勉強させてもらった。卒業後直ぐに辞めると言う言語道断な振る舞いにも関わらず退職時には励ましの言葉をいただいた。社会人は斯くあるべしと学んだ。

9年間の時を経て通産省に入省、電子技術総合研究所という2番目の職場は日本を代表する天才・秀才の集団で自らの非力さを痛感しつつ、学力と研究能力が一对一対応しないこともまた学んだ。霞ヶ関勤務では国会質問の政府委員席で政治屋さんへの漠とした不安が確信に変わった。

3番目、本学に迎えていただいたのは平成3年の春、あれから21年が経過した。学生から教職員諸賢まで誠に素朴で、心身ともに汚れ切ったこの身が恥ずかしい。ここでは足ることを知る生き方を学んだ。この間、家族共々滞在したドイツでの生活で日本人の生活が貧しいことも思い知らされた。

これまでのご厚意に感謝し、「心豊かに生きる」と、これを次のステージの目標としたい。



チャープパルスマイクロ波CT装置とともに。

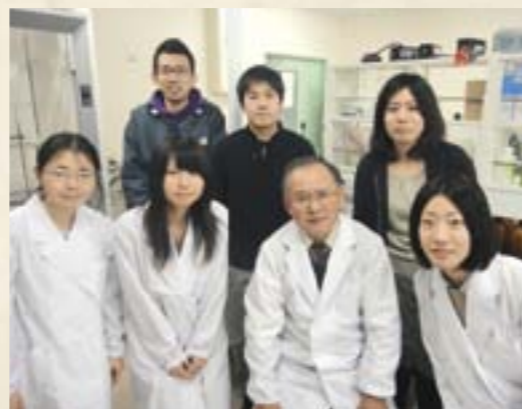
新潟大学を去るにあたって

学生時代も含め、47年間お世話になった新潟大学を去ることになります。これまでの人生の大半を新潟大学で過ごしたことになります。

農業水利ということで、灌漑や排水を専門にしてきましたが、なかでも水質に関心があり、水環境の改善にかかわってきました。亀田郷にあるというより、サッカースタジアムビッグスワンに隣接しているといった方が分かりやすい鳥屋野潟の水質改善に長年取り組んできましたが、このことが、全国初の国土交通省が許可した環境水利権につながり、嬉しく思っています。

佐渡島ではトキの野性復帰が行われましたが、餌場づくりということで水田にドジョウをよみがえらせるために普及性の高い水田魚道の設置も行いました。また中越地震を契機に災害復興科学センターができましたが、その農業分野長として農地や農業施設の復旧・復興にかかわり、新潟県にも震災アドバイザーとして提言してきたことも深い印象に残っています。

これまで、お付き合いいただいた、教職員の方々、卒業生の方達には様々なおりで、お世話になりました。心よりお礼申し上げます。また新潟大学には好きな仕事を通して、地域に貢献できるというやりがいのある場を与えて頂き、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。本学の発展を心よりお祈り申し上げます。



平成24年1月、水質分析実験室で院生・卒論生と。

退任にあたって何かを伝えるとすれば

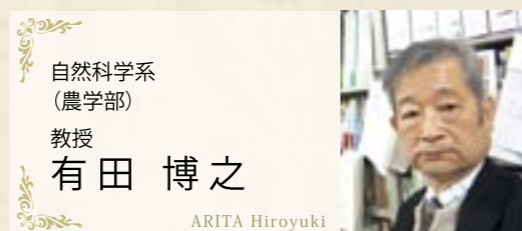
かつて海外で調査することは夢であったが、地球を理解するためには、文字通り世界を駆け回って調査しなければならない。日高山脈から始まった研究は、北海道、ロシアコリアック、サハリン、インドネシア、さらに潜水艇や深海掘削で日本海、インド洋、太平洋の深海底へと広がってきた。この15年間はオマーンをフィールドに設定し、多くの院生・学生と調査を行ってきた。このプロジェクトは、現在では海洋モホールプロジェクトの重要な一部を構成しているだけでなく、地球環境や地球史解析など幅広いテーマへと発展してきている。この20-30年間は、地球科学におけるパラダイムの転換が進行し、地球に関する理解が大きく進んできた。しかし、昨年の東日本大震災は科学のあり方に関して深刻な問題を提起した。地質学的手法では、超巨大地震や巨大津波の発生を予測していたが、残念ながら国の防災対策に生かされることはなかった。人類の生存と発展のために長期的戦略を考える上で、足下の地球について深く理解することが重要だし、地質学の重要性がもっと理解されなければいけない。新潟大学を退職して自由な身となるので、今度はもう少し気楽に探求を続けたいと念願しています。



2012年の正月をアラビア半島のオマーンで迎えた新潟大、金沢大、岩手大学のメンバーの集合写真。今回のオマーン地質調査には、この他に信州大や横浜国大などからも多数が参加した。

活力をもらった学生諸君に感謝

12年間の教員生活であった。大学という空間は卒業以来26年振りで、俄教員として期待と不安を抱えながら赴任した。不安のあった授業は、努力不足か旨くいった例しがなく、今でも苦手である。これで下手な授業を続けることへの罪悪感から解放されると思うと、軽い安堵感すら覚える。大学生の期待と魅力は、当然のことだが学生達の存在であった。自分の学生時代と気質が大きく異なるので暫くは戸惑ったが、娘達と同世代なのだと気付くと違和感は和らいだ。毎年、春先には新入生達が力の入ったオシャレを楽しんでいたりと、卒論生が論文の組み立てに戸惑ったり苦悩する姿を見るのは新鮮で、かつての職場とは違ったリズムを与えてくれた。また、これまで困難であった現地に深く関わる調査が卒論生諸君の協力を得て進めることができた。無理な注文にも応じようと努力してくれた研究室の卒論生諸君、どうも有り難う。仕事では、矢張り中越地震(2004)、中越沖地震(2006)を契機として大規模地震災害の復旧・復興課題に取り組むことになったのが、現在進行形ながら思い出深い。自分の感受性との戦いでもあるが、無力さを噛みしめながら現地に立ち続けるしか無いのだと、改めて思う。



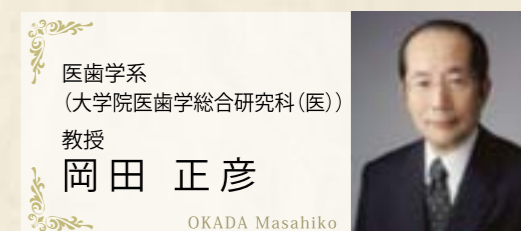
体的にはきつかったが楽しい時間であった卒論生諸君との耕作放棄地調査。

数理で考えた医学

本学を卒業後、内科医の道を選択しましたが、学問への情熱やみ難く、診療と研究の二足のワラジを履くことになりました。子供のころから数学に興味があり、早速、数理で医学を考えるという研究を始めました。

当時、本学には、コンピューターが2台しかありませんでしたが、幸いその1台(米国製PDP-12)を使うことができました。取り組んだテーマは、心電図の自動診断ロジック、音声のスペクトル解析による病状判定、ベイズ定理による神経疾患の鑑別などでしたが、その装置ではアセンブリ言語(機械語のようなもの)しか使えず、ハードウェアの知識が必須です。お陰で電子回路なども完全に理解することができ、エキサイティングな日々を過ごすことができました。

しばらくしてパソコンが普及し始めたころ、学生に「一緒にプログラムを作ってみないか」と問いかけたところ、「売っているのになぜ作るのか?」と言われ愕然としたものです。しかし、それも今ではいい思い出。最近パソコンで高度な統計計算もできるようになり、医学の研究成果も格段にレベルの高いものとなりました。この先の更なる進歩が楽しみです。ガンバレ、後輩たち!



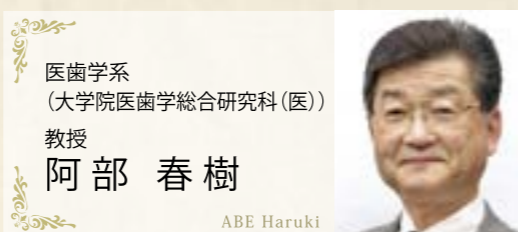
私が創部したコンピュータークラブの諸君と。

新潟大学を退任するにあたって

私は、1971年3月に新潟大学医学部を卒業後、ただちに新潟大学眼科学教室に入局しました。三国政吉教授と岩田和雄教授のお二人の教授に師事し、特に岩田教授には眼科学の基礎から臨床に至るまで徹底した御指導を受けました。さらに1976年から78年にかけて2年間西ドイツマックスプランク研究所へ留学して、E.Dodt教授とE.Zrenner教授に研究の指導を、さらにフランクフルト大学眼科の真壁禄郎教授に眼科臨床の御指導を受けました。帰国後1993年には、岩田教授の後任として、母校の新潟大学眼科の第5代教授に選出されました。2001年に大学院大学になり、所属が新潟大学大学院医歯学総合研究科に改組されましたが、教授に就任してから今日まで、研究・教育・診療そして社会貢献を教室の4つの大きな柱にすえて、教室を運営してまいりました。

まず第一に、研究は教室のメインテーマである「緑内障研究」を最重要テーマとしてかかげ、それを強力に推進するために大学院生は原則として新潟大学の脳研究所や腎研究所そして関連の基礎の教室で緑内障関連の基礎研究を行う体制を作りました。さらに大学院を卒業した後に、海外留学して緑内障関連の基礎研究を発展させるといった流れができました。1993年に私が教授に就任してから毎年5人～10人の研修医が入局してくれましたが、2004年4月の「新医師臨床研修の義務化」以降は、日本全国の特に地方大学に所属する研修医が激減し、結果として地方大学の医局制度は脆弱化し、地域医療は随所で崩壊寸前になっているところが増えていっています。新潟大学眼科学教室も例外ではありませんが、それでも地方大学では屈指の教室員数を誇り、かつ多くの有能な人材にめぐまれて、無事退任を迎えられる事は何にも変えがたい喜びだと思います。

永い間お世話になりまして、ありがとうございました。



医歯学系
(大学院医歯学総合研究科(医))
教授
阿部 春樹

ABE Haruki



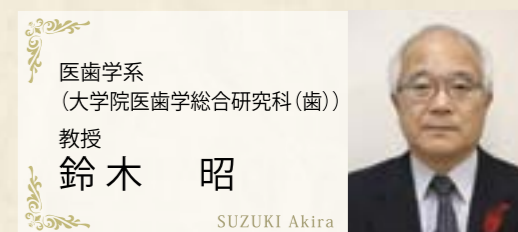
ハルビン医科大学の呂大光、劉平教授を迎えて。

パッション溢れる口腔生命福祉学科に感謝

全国に先駆け「口腔や食べること」の専門知識を身につけ、保健、医療、福祉を総合的に担える専門家を養成することを目的に創設された口腔生命福祉学科で、私は平成17年度以降社会福祉援助学を担当いたしました。前任は新潟県社会福祉行政職員です。社会福祉は変革の只中にありますが、その理論と実践をつなぐ結節点が援助技術social workです。

これまで命の伸長は医療が、暮らしは福祉が担ってきました。これからは少子・高齢社会にあって命も暮らしも包摂したかけがえのないその人の人生を応援していくことが必要です。命、暮らし、人生いずれもlifeです。保健、医療、福祉一体化の謂です。これを見事に具現して、学生が4年の間にperson-in-contextとしての人間をまるごと理解し応援する力を身につけていく様にはいつも感動させられました。これには学生1人ひとりの資質や努力はいうまでもないのですが、学部をあげて推進しているproblem based learning PBL 学習法と新潟大学universityという学習環境が大いに働いています。

溢れるパッション、ミッションそして持続するテンション、元気いっぱいの口腔生命福祉学科で充実した毎日を与えられたことに感謝です。



医歯学系
(大学院医歯学総合研究科(歯))
教授
鈴木 昭

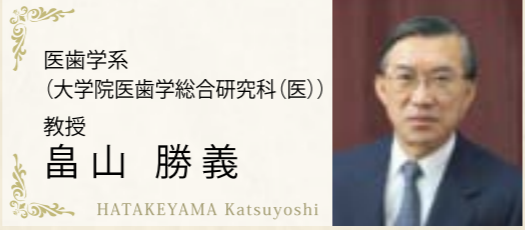
SUZUKI Akira



平成24年1月6日歯のふれ愛ひろばにて。



新潟大学を退任するにあたって



私は新潟大学医学部に在学中はバスケット部に所属していた。その縁もあり、平成5年4月より医学部バスケット部の部長を仰せつかった。その年の医学部バスケット部の成績は、男子が春季三大学戦で優勝、関東信越六大学戦で優勝、女子も春季三大学戦で優勝、北医体で優勝と私の部長就任をお祝いするかのようによい成績だったので、この年の10月9日にこの4つの優勝カップを並べての祝勝会を開催したことを記憶している。しかし、なぜか医科学生体育大会の最高峰である東日本医科学生総合体育大会(通称、東医体)では勝てなかった。この東医体は昭和33年に創設され平成23年には第53回を迎えた歴史ある大会であるが、その後も我がバスケット部は東医体では準優勝はすれど、優勝は勝ち取れなかった。

しかし、平成21年の東医体で我が医学部バスケット部の男子部が創設以来初めての念願の優勝を成し遂げたのである。そして昨年の平成22年には準優勝に甘んじたが、今年平成23年には再び優勝の栄誉に輝いたのである(写真はこの時の祝勝会の記念写真)。

私の新潟大学退任、また医学部バスケット部長退任の年にあたり、大きな美しい花を添えてくれた医学部バスケット部の諸君に心からお礼を申し述べたい。私の新潟大学在職中の記憶に残る最大の出来事の1つである。



平成23年9月 東医体20回目の優勝祝賀会。

今回の卒展では、卒業生25名、修了生6名から、実技作品23点・論文作品8点が並びました。



CAMPUS INFORMATION

第60回 新潟大学教育学部美術科



卒業制作展ポスターです。

卒業修了制作展

平成24年2月1日から6日までの約一週間、新潟県民会館3階アートギャラリーにて、大学院教育学研究科の美術教育専修の修了生と、教育学部美術教育専修と、芸術環境講座造形表現コースの卒業生による卒業修了制作展が開催されました。人との出会いや繋がりが、学んだことから表現された学生生活の集大成となる作品です。自己と向き合い、試行錯誤した姿が垣間見える作品たちから、その一部をご紹介します。



constellation 星野りょう子

卒業修了制作展



夕風の映える 本間 沙弥

■制作意図■ 海での印象に残る風景を詰め込みました。穏やかな海の水平線に夕陽が沈んでいく様子を見届ける時、今日という一日を無事に終えることが、ごくごく当たり前だけど幸せなことなのだと気付かされます。

■苦労した点■ 奥行き、広さの表現です。描きこみが少ないと空間感が出ないし、描きこみすぎると画面が窮屈になってしまう…描いたり潰したりの、足し算引き算に苦戦しました。

■制作意図■ 4年間の集大成の作品として、「今まで」と「これから」を区切るための作品を制作しました。様々な素材を組み合わせるコラージュという技法を用いて、私にとっての生きていく上で必要だと思うテーマを表現しています。一つ一つテーマの違う連作です。これから先、私の変化に合わせて、このテーマも変化すると思います。バランスをとりながら世界を渡って行きたいです。

■苦労した点■ コラージュに用いる素材選びに苦労しました。表現したいものにふさわしい素材を探すために地元の山へ行ったり、アンティークショップめぐりをしたりしました。constellation (星座)は、「その位置にあることによって意味をもつ素材をちりばめた作品」ということからつけたタイトルです。



月の刻 (とき) 久保木 郁子

■制作意図■ 空、海、夜景など、大好きな風景達は心に高揚感を与えてくれます。さりげなく存在している風景に感謝しながら、見る人を楽しませられるような絵を描きたいと考え、この絵を描きました。想像することは、心の豊かさにつながると感じます。

■苦労した点■ 昼と夜が同時に存在するという非現実的な空間をどのように自然に見せるかという点で悩みました。画面の下に存在する波の流れを一連にしたり、中央に大きな月を描くことで不自然さをカバーしたつもりです。また左右の画面のバランスが偏らないように、物体の配置にも気をつかいました。

■制作意図■ 「彼」は150年もの間、その町の空気を吸い、その町の人々の悦びと共に在りました。「もしも時間や記憶を飲むことができたなら。」彼の口先から搾り出される一滴は、発酵と熟成を重ねた極上の味わい。…かもしれません。

■苦労した点■ 制作中にメキメキと音をたて倒れることもありました。支えてくれたアトリエの仲間たちに感謝です。

時を飲む 丸山 広大



■制作意図■ 溶けた形態の奇妙で、見ていると別の世界に移ってしまったかのような感覚に魅かれます。一つは有機的な形、もう一つは幾何学的な形が溶けていく様子をイメージして表現しました。

■苦労した点■ 木の流れによっては思ったように彫れないところが多くありました。思い描いている形になかなか近付けず、苦労しました。



彫刻

移ろい
岡田美奈

■制作意図■ 私は、「服装」は普段何気なく人々が行っている「自己表現」と考えています。衣服を選ぶこと、組み合わせることを通して、自己を表現する幸せを感じて欲しいと思い、来場者参加型の空間をデザインしました。

■苦労した点■ 参加型の空間を創り上げる為に、全体を客観的に見て、人々を惹きつけられるような雰囲気作りを心掛けました。また、自分自身も様々なパーツを集め、組み合わせて一つの空間作りを「楽しむ」という事にも気を付けました。



X-cross × cloth-
柳 愛美

卒業修了制作展



■制作意図■ 定まらない自己像を抱え、どの私を切り捨てるかを決断することの出来ない自己の未熟さを表現しました。

■苦労した点■ 黒い色をテラコッタに染み込ませるために、外で長時間焼き火をしたのですが、その時の煙が息苦しくて大変でした。

揺蕩う (たゆたう)
玉木恵美

leaf light
渡邊辰洋

■制作意図■ 次世代の光源であるLEDは小型、低発熱、省エネルギー等の多くの長所を持っている。その長所を活かしてかつて不可能であったフォルムをデザインした。

■苦労した点■ 器具の本体は樹脂で成形している。型から取り出した後、研磨と塗装を施して表面を仕上げる際に長く時間を要した。



～ 卒業生と学生をつなぐ～

新潟大学キャリアセンター

CANシステム



社会の先輩としてのアドバイスを 学生にお聞かせ下さい!

『CAN システム』は、在学生が卒業生に就職活動の相談ができ、また卒業生の方からも在学生へ社会の現状や、働くことのやりがいなど、生の声を伝えられるシステムです。先輩からのアドバイスは、厳しい雇用環境の中で不安な気持ちで就職活動に取り組む後輩たちには、心強い支援になります。



卒業生の皆さんには、
本システムの趣旨をご理解いただき、
ぜひご登録をお願いします!

■ご登録はとてもカンタン!

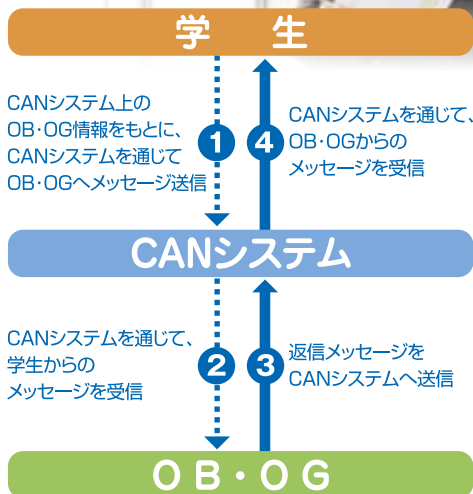
「新潟大学 CANシステム」で検索、または、下記URLからご登録ください。

<http://www.career-center.niigata-u.ac.jp/jobnetwork/>

※システムを経由するので、お互いの個人情報(氏名・メールアドレス等)を公開せずに安心してご利用いただけます。

《お問い合わせ先》新潟大学キャリアセンター TEL:025-262-6087

CANシステムの流れ



絆

メールでつながる

～ ずっと使える 新大のメールが登場! ～

卒業・修了した後もメールを利用したいという声にお応えして、
2012年3月の卒業・修了者から
新たなメールサービスを開始します。

概要

在学時のアドレスの@以下を一部変更したアドレスを卒業・修了者全員に発行します。

在学時 在籍番号 @mail.cc.niigata-u.ac.jp

卒業・修了後 在籍番号 @alumni.niigata-u.ac.jp

☆在学時のアドレスに届いたメールは、新しいアドレスに自動転送されます☆

今年から!!



卒業した仲間たちは
どうしているかな?
久しぶりに集まりたいな!



在学時のメールを
引き継いで、
就職活動を続けたい!

こんなときに
便利♪

同窓会や大学での
イベント情報が
ゲットできる(´▽`)



【新大広報 Back Number】

http://www.niigata-u.ac.jp/profile1/100_pamph/shindai_kouhou.html

新大広報のバックナンバーは上記のURLから見るができます。また、学務部学生支援課で受け取ることもできます。

新潟大学ホームページ

<http://www.niigata-u.ac.jp/>

2012年卒業記念号 [No.182]

編集・発行 / 『新大広報』学生編集スタッフ

新潟大学学務部・新潟大学広報センター

印刷 / (株)第一印刷所

リサイクル適性

この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。